FAITH

渡辺　政直

元日本聖公会首座司教。1986年に退職後、「再度、現場の第一歩に戻り、人々への奉仕活動の道を歩みたい」という希望のもと、1987年7月、夫人とともにタンザニアのダルエスサラームに渡る。当地において、貧しい人々や、同港にある「THE MISSION TO SEAMEN」という船員のための休養施設で奉仕活動を行う傍ら、タンザニア各地の英国教会（THE ANGLICAN CHURCH）でも奉仕活動を続けている。夫人は看護婦の資格を生かし、医療奉仕活動をしている。

アフリカ便り

ザンジバル

ダルエスサラーム市の北方およそ80キロメートルのインド洋上に「ザンジバル」と呼ばれる小島がある。

1964年、この島はタンガニーカ共和国と合併、タンザニア連合共和国が誕生した。東アフリカで最も古い歴史を秘めた島である。

古代より幾世紀にもわたり多種多様な国人が、象牙や奴隷、香料などの買い付け商人として来住した。スメル人、アッシリア人、エジプト人、フェニキア人、インド人、中国人、ペルシア人、ポルトガル人、オマン・アラブ人、オランダ人、フランス人、英国人だ。その中でオマン・アラブ人とペルシア人が定住者となり、統治者として16世紀にポルトガル人が、最後（18世紀）に、オマン・アラブ人が残った。

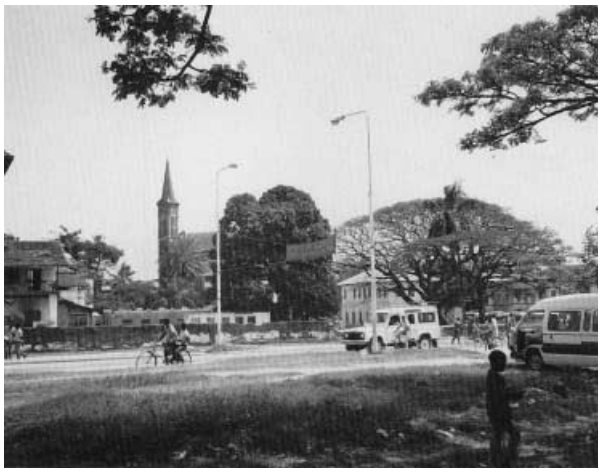
香料は、1818年にインドシナより移植した「クローブ」がこの島の気候風土に適していた。豊かな収穫をもたらし、ザンジバルは「香料の島」として世界的な注目をあびた。

また、ザンジバルは東海岸最大の奴隷市場となり、18世紀初頭におよそ600人の奴隷商人を抱えていたといわれる。1860年のリグビーの報告書を見ると、奴隷はタンザニア内陸部ニアサ湖周辺に居住していたムニアサ族、ミヤン族、マジンド族、更にマンガンガ族で、およそ40日間の徒歩によりザンジバル対岸にあるバガモヨに集められた。そこで体力を失った者や病者は捨てられ、健康者のみ「ダウ船」で北東50キロのザンジバルに移され、奴隷商人の手で売られた。

バガモヨの地はダルエスサラームの北西50キロにある。「バガ」は残す、「モヨ」は心で、「心を残す」という意味である。身体を売られて、異国に旅発つ者、せめて心だけでもアフリカの地に置いていきたい……との切実な願いがこめられた地名だ。アフリカ内陸部よりザンジバルに運ばれた奴隷は年間5万人を越えた。途中で死亡した者、捨てられた者はその5倍に達すると推定されている。奴隷制度の廃止は1873年6月6日である。それまでにザンジバルから中近東やインド方面、更に南米ブラジルに売られて行った奴隷の数は1500人に及んだ。

1877年、ザンジバルに宣教師として派遣された英国国教会（アングリカンチャーチ）のスチール主教は、廃止された奴隷市場の真只中に大聖堂を建て、平和と自由、人権と正義の尊さを全世界に向けて宣言した。大聖堂の説教壇の壁にかけられた十字架は、奴隷制度廃止に生涯を捧げ北ザンビアで逝去したスコットランドの宣教師リビングストンにまつわるものといわれている。また主教座前の床にはスチール主教の墓がある。

ザンジバルの旧市街はアラブ人の手になる白壁石造りの家が密集し、さながら迷路の感がある。白壁は島の海岸を形成する珊瑚礁から採掘した珊瑚を高熱で焼き、粉末状にした石灰と砂を混ぜて塗装したものである。青空と緑に映える島、紺碧の海にくっきりと浮き出る白壁の家々は素晴らしい眺めだ。モロッコのカサブランカも「白い街」の意であることを思い出す。ザンジバルは歴史上の美と醜とを織りなした芸術品のように、無言の中に多くのことを語り続けている。



1877年（115年前）スチール主教により建てられた
（元奴隷市場敷地中央）英国国教会大聖堂